

伊藤祐二（作曲家）

## ユージ 芹に 気をつける

「テオルボの新しい音楽を探る・コンサート&デイスカッション」

2022年10月16日星稜会館

テオルボ奏者（注）の上田朝子さんが、八月にワークシヨップを行い、作品を募集、今回のコンサートとなった。バロック期の古典と、川口孟、斉芸琨、坂口大介、根本卓也、渡辺俊哉、の新作が交互に演奏され、近藤譲（作曲家）を交えてのデイスカッションが行われた。上田さんの演奏、五曲の新作も楽しんだが、この「専門家の集まり」での議論もまた興味深いものだった。

上田朝子さんは、バロック期の曲を演奏する時、シンプルな楽譜から、とても複雑、繊細、豊かな演奏を自在に、半ば即興的に生み出す。それが可能なのは、「その時代の演奏様式、習慣」があるからだ。それに基づいて、演奏家は安心して、自在に半ば即興的に「自分の音楽」を演奏できる。

一方、現代の新作の場合には、そうは

いかない。楽譜は手がかりにすぎず、それがどういう音楽なのか、どう弾いたらよいか、探りながら練習し、作曲者に問い、答えを反芻しつつ、それを楽器と自分の感性、身体に共振させ……と多くのプロセスを必要とする。（それはとても楽しく意味のあるプロセスだと私は信ずるけれど。）

デイスカッションで作曲家たちは、自分の書いた曲を、演奏家が、まるでバロック期の曲を演奏する時のように、安心して自在に、しかも作曲家の意図が実現されるかたちで演奏できるようにするにはどうしたらよいかと議論していた。記譜法の問題、演奏家との関係、等々。

しかし、そこで必然的に浮かび上がったのは、現代の作曲家が置かれた状況。作曲家、演奏家、（多分、聴衆も）が、安心して寄って立つことができる共通の音楽的基盤を喪失している——という現実だ。もちろんそれは、現代の人間の様々な孤立と分断を反映しているわけで、現代芸術が正しく我々のものだという証明でもある。そしてその解決もまた困難だが、取り組まねばならないものだ、という事を（多分）再確認し、同時に幾分か途方に暮れたのだった。

（注）テオルボは、ルネサンス、バロック期に用いられた撥弦楽器で、（これ以上の説明はここではできないが）、長いネックを持ち、多くの弦を持つ、いわゆる「古楽」で用いられる伝統楽器。

Hey Hey Rise Up / ジャンクフロイド

SICP 6479 (CD)

ウクライナのバンド Boombox のポール、アンドリーイ・クリヴニュークは、コンサートツアーを離脱して祖国防衛隊に入り、キーウの広場で、軍装のまま第一次大戦中のプロテストソングを歌い、ネット上で評判となり、広くシェアされた。

<https://www.youtube.com/watch?v=ebdBEHJNMRk>

知己を得ていたデヴィッド・ギルモアが、これをサンプリングして取り込み、ピンクフロイド28年ぶりの新曲としてリリース。（売り上げはウクライナに）

<https://www.youtube.com/watch?v=s8EpkcVt1d4>

ジャケットは、キューバの芸術家、ヨサン・レオンによるウクライナの国花・向日葵の絵で、やはりネット上で注目された恐ろしい動画中の老人に捧げられている。

<https://www.youtube.com/watch?v=6BFVILNvYtHA>

私たちの「共通の音楽的基盤」とは何か、そしてその意味を、深く考えないわけにはいかない。